

---

# 世界の森のアールリア

風見 あこ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

世界の森のアールリア

### 【Zコード】

Z0272K

### 【作者名】

風見 あい

### 【あらすじ】

世界のすべての森からつながる赤い森。迷える画家クライスが辿り着いたその森には不思議な魔女と使い魔が住んでいた。魔女。ボムはクライスの悩みを解決してくれると言つが……？

迷つたり、悩んだり、死にたくなつたりしたら。

この世界のものならどんな森でもいいから、その中を田をつぶつて駆け抜けてごらん。木にぶつかるとか、石につまずくとか、そんなことを恐れる必要はないよ。風のように走り抜ければいい。紅い森で、アールリアが待つているから。

リリー・エル著『世界の森の魔女』より抜粋

1、

目を開けた瞬間、視界が赤に染まつた。

はじめは目を怪我したのかと思った。しかしそく見ると違う。クライスは、真っ赤な葉をつけた木々に取り囲まれていたのだ。こんな森、見たことがない。クライスは、あたりをぐるりと見渡してそう思った。どの木のどの葉も、すべてムラのない赤に染まっている。秋の紅葉とは違つて、緑だったころの面影がまつたくなかつた。

クライスは近くの木の枝から一枚、葉をもいでみる。クライスが今までに見た、どんな赤よりも紅く染まつたその葉は、若葉のようなみずみずしさを持つていた。

もし、ここに絵の具があつたなら。どの色とどの色を混ぜようか。ただただ、手にした葉を見つめる。クライスは葉をいろいろな角度から見て、感嘆のため息をついた。見れば見るほど惹きこまれる。

いつの間にかクライスは、美しい赤色のとりことなつていた。それほどに、彼は芸術家だった。

だから彼は気がつかない。木々の間にかくれて建つてはいる、ちいさな小さな家の存在に。そして、その家の戸がゆっくり開けられたことに。

「あら。ずいぶん、この木を氣に入ってくれたみたいね」

「ああそうだ、この森はうつくしい。今すぐでも、絵にしたいよ……？」

声に答えてから気がつく。この声は誰のものなのか、と。葉から顔をあげて、クライスは声のした方を見やつた。そして、彼は茶の目をみはる。

まさか人がいるとは思わなかつた。

「……君は」

クライスの目の前に、少女が立つていった。赤毛を頭の高いところで、真っ赤なリボンを使ってふたつにしばり、三つ編みにする、そんな髪型をしているせいか、小生意氣そうな表情のせいか、幼く見える。年のころは十ほどか。その年齢のわりには、大人であるクライスを敬うそぶりなど一切見せなかつた。

腰に手を当て、さも自分が偉いと言わんばかりに、少女は言う。

「あたしはポム。ただのポムよ」

で、あんたは。少女 ポムは続けた。

「あんたは、クライス・ロイスね。迷える画家さん」

なぜ、自分の名前を。クライスは不気味に思つ。名前こそ有名かもしれないが、顔はほとんど知られていないはずだぞ？

「なぜ、あたしがあんたの名前を知つてるかって？ それはね、あたしが」

魔女さまだからよ。

それは、あまりにも信じられない言葉だった。

「魔女、だつて……？」

そんなはずがない。クライスの知る魔女は、もともと人間だつた者たちだ。名前を当てるなどという予知能力は持つていない。黒い

服を着た黒魔女は占いをし、白い服の白魔女が万能の薬をつくる。それがクライスの知る魔女だ。

真っ赤なワンピースの上に、これまた真っ赤な外套を羽織った魔女など、見たことも聞いたこともない。

「君が魔女というなら、その恰好は何なんだい。白でも黒でもない色だと、どっちの魔女だか分からぬじやないか」

「あたしを、そこらへんの黒魔女や白魔女と一緒にしないでよね」

クライスの言葉に、ポムは憤慨したようだ。

「ふんと鼻をならして、

ポムは言つ。

「あたしは、<sup>あか</sup>紅魔女。だから赤い服を着てたつていいじゃない。だいたい白や黒なんて、地味なのよ、地味。赤が似合つんだから、あたしは紅魔女でいいのよ」

無理やりな理論だと、クライスは思つた。だがたしかに、強気なポムには赤という色がよく似合つ。もし彼女が色彩を持つていなかつたとしても、クライスは彼女を赤の絵の具で描き表しただろつ。

「それで、森も真っ赤というわけか」

「そうよ」

きれいでしょう。その言葉には、クライスも素直にうなづけた。美しいものはこの目でたくさん見てきたから分かる。絶景といわれる景色にも勝るとも劣らない。

ポムはクライスの態度にすっかり気をよくしたようだ。気の強そくな青い目が細められる。

「まあ、あんたの言つとおりね。見る目あるじやない」

「僕は一応、芸術家だ。美しいものが何か。そんなことくらいは知つてゐるさ」

「そうね」

はじめて、ポムはほほ笑んだ。花が咲いたかのような笑顔だつた。魅力的に笑う少女だ。クライスは右手が震えるのを感じ、それを押さえつけるために、ぐつと拳をにぎつた。筆をもちたい、今この目が映し出しているものを描き下ろしたい。そう利き手が訴えかけ

てくる。

彼女のもの以上に美しいほほ笑みはない。だが、こんな表情だつて十分に芸術価値があるじゃないか。

「クライス」

少女が、彼の名を呼んだ。

「何だい？」

「ほら」

おもむろに、ポムは手をあげる。そしてクライスの顔を指し示した。

「笑えてるじゃない」

慌てて自分の顔に手をやり、クライスは氣づく。知らないいつち、彼の口角が上がっていた。

「この自分には、まだ笑える力が残っていたのか。

「それが、生きてるつて証拠よ」

クライスの心が分かつたかのよつて、ポムは言つた。傲慢な態度こそ崩さなかつたものの、彼女の言葉はクライスの心にじんわりとしみた。

ポムは続ける。

「あなたの心は死んでない。死んでないんだから、体の方も死ぬ必要がないでしょ？」

あたしには、何でもわかつていいのよ。ポムは不敵にほほ笑んだ。「あんたがちゃんと生きられるよつて、あたしが何とかしてやるわ

2、

クライス・ロイスと名乗れば、たいていどこの宿でも歓迎してくれるものだ。絵を描いてくれと頼む者もいたし、有名画家が宿泊したというだけで光栄だからと、ただで泊めてくれた者もいた。とどまる場所はなかつたが、世界のどこへ行つても仕事はあつた。だか

ら、クライスは生活に困ったことはなかつた。

真実を描く天才画家 そう呼ばれ始めたのは何歳のときだつたか。ものじこじろついたときから筆を手にしていた。多くの画家に師事し、何度も母国の絵画展で賞をとつて、そうして世界へと旅に出た。それは十六のときだつたが、ところにはすでに、クライスは有名だつたのだ。だから、いつ？天才？になつたのか、クライスはまったくおぼえていない。

絵を描くことが好きだつた。それと同じくらい、美しいものを眺めることが好きだつた。

クライスは美しいと思ったものを、あるがままに描く。本物とそつくり いや、本物そのものをクライスは紙の上に、絵の具だけで表した。人々はそれを見ると口をそろえて言つ。美しい、と。美しいものはまだ他にもあるはずだ。クライスは旅を続けた。本当に心の底から惹かれるものを探して。

\* \* \*

彼はそのとき、二十をとっくにこえていた。

「こここの風景を描いているの？ とても上手ね」

褒め言葉に舞い上がるような年ではなかつた。これまでに称賛は數えきれないくらいに聞いてきたので、どう対応すればいいのか、クライスは心得ていた。

「……ありがとう」

適度な笑顔をつくりクライスは、絵を覗き込んできた女性に礼を返す。それですべてを終わらせるつもりだつた。キャンバスに視線を戻そうとして 彼ははつと気づく。

「わたしも、この町の自然は美しいと思うわ。だけどね」

太陽の光を受けて、彼女の金髪がきらめいた。そして、それより

ももつと輝きを放っていたもの。

これは。

彼女の顔を見た瞬間、クライスはある観念にとらわれた。

これこそが……！

彼女は続けて言つ。クライスの目をまっすぐに見つめて。「本当に美しいものつて、目に見えるもののかしら」わたしはあなたみたいに、絵のことには詳しくないからわからないけど。彼女はつぶやいた。

「そういうものを、他の人にもわかるように描きあらわすのが、画家なんじゃない？」

彼女の名は、シェリーといった。

今までのクライスの人生において、唯一彼の芸術心をとりこにした女性であり、唯一彼が心から愛した人 それがシェリーだった。

3、

あなたの望むことは分かつてゐるわ。ポムは言った。

「あたしが何とかしてあげる」

「何とかつて……君はまだ、子供だろう！」

芸術を知らない子供に何ができるのか。クライスはポムの自信満々な態度をいぶかしく思う。二十年以上、芸術家として絵に触れてきた自分すらもわからないというのに。

「あたしには、わかるわ」

クライスの心を見透かしたように、少女は笑つた。そして「リコル」と、クライスの知らない名前を呼ぶ。

「あれを持ってきて。いちばんおつきなやつね」大丈夫、あたしに任せなさい。青い目がそう語つた。自信に満ちたその色に、クライスはもう何も言えない。

この子は、本当に子供なのか？

傲慢な子供に見せかけただけの、老人ではないのか。ポムの目は、まちがいなく多くのものを見てきた目だ。二十八年の時を重ねただけでなく、世界各国をまわったはずのクライスよりも、青い目は多くを知っている。クライスは悟った。

他の魔女と違うわけだ。いや、自分が今までに見てきた魔女は、ほんとうの魔女ではなかつたのだ。

そんなとき、別の声がクライスの思考を遮る。

『持つてきたぜ、ポム！』

「ありがとう、リコル。これなら、彼もいっしょに飛べるわ

声の方を見て、クライスは目をむいた。

「……猫が、しゃべつた？」

ポムの隣には、真っ赤な毛並みを持った小さな猫がいる。背中に巨大なほうきをのせているせいで、押しつぶされそうだったが。それはたしかに猫だった。

使い魔。その文字が頭をよぎる。力のある魔女が使役するという、異類のもの。

「ああ、驚いた？ この子はリコルよ。あたしの相棒」

『そういうことだ……つて早くこれを受け取れ！ 重くてしうがねえ！』

「はいはい、わかつたわよ

面倒くさそうにポムはほうきを、軽々と持ち上げた。背丈の一倍はあると思われる長さのものを、だ。何か怪しい術を使つたのか。クライスはポムを観察してみたが、まったく分からぬ。

『そういうことだから、クライス。乗りなさい

「……え？』

何の冗談か。

「まさか、これで空を飛ぼうなんて言つんじゃないんだろうな？」

「ただけど。何か問題でもあるの？」

ポムはびしゅりと言つた。そしてほうきの柄の先端にまたがる。

赤猫リコルもそれに続いた。

「ほら、早くしなさいよ。あたしの力がないかぎり、あんたは一生この森から出られないんだからね。身の程をわきまえなさい」

ほつきで、空を飛ぶ。まるでおとぎ話に出てくる魔女みたいだ。クライスは思つて、それからすぐに訂正する。そうだ、彼女は魔女だ。

おそるおそるクライスは、ポムの後ろの柄をつかんだ。こうなつたら、もうやけだ。彼は勢いよくぼうきに飛び乗る。

「そう、それでいいわ。ぜつたいに手をはなしちゃダメよ」

次の瞬間、クライスの体は宙に浮いていた。

「ぼ、ポム！」

「いい、クライス？ あたしがいって言うまで目をつぶついて」  
ポムの言葉に従わないわけにはいかなかつた。というより、彼女に言われるまでもなく、クライスはかたく目をつむつっていた。地面から足が離れると、これほどまでに体を頼りなく感じるのか。クライスは思い知らされる。空を飛ぶという初めての体験は、クライスの想像以上に怖いものだつた。

「目を開けて、クライス」

しばらくしてポムが言った。

「大丈夫。手を離さないかぎり落ちたりしないわ」

その言葉に、クライスはおずおずと目を開ける。そのまま大地を見下ろして、彼は仰天した。

「ここは……！」

「そうよ。あなたの村。わかるでしょ？」

クライスは飛んでいた。“彼女”と長い時を過ごした、大切な思い出の家の上を。

シェリー。

久しぶりに戻ってきた我が家を前に、クライスはそつと愛する人

に思いを馳せる。

ショリー。いちばん愛した笑顔を心の中に思い描こうとして、急にクライスは哀しくなった。思い出したくとも思いだせない、最高のほほ笑み。それはいったいどんなものだつたのだろうか。やつぱり、自分には 描けない。

#### 4、

地に降り立つと、ポムはクライスに断りを入れるわけでもなく、ずかずかと彼の家に入りこんだ。

「ふうん。仕事場と生活の場が同じになつているのね」

小さな煉瓦造りの小屋。クライスが安住の地と決めたこの家は狭い。我が家に足を踏み入れた瞬間、クライスは出ていく前とまったく変わつていない光景に愕然とした。

「これが、あんたの悩みつてところのよつね」

ポムは早々に気がついたようだ。画材道具が散乱した部屋の中から、キャンバスを見つけ出す。クライスはそれを見せつけられ、またもどかしい思いに駆られた。

ショリー。

ポムよりも巨大な画布には、金髪の女性が描かれている。構成・色づかいとともに完璧なその絵には、ただひとつだけ欠陥があつた。『顔がねえぞ。この絵』

ポムの頭の上に乗つたりコルが、絵を見下ろして言つ。

『そういう絵なのか？ 人間』

「いや……違う」

クライスは力なく、否定した。

「描けないんだ。彼女のいちばんうつくしいほほ笑みが」

クライスの絵には、何度も描きなおしたあとが残つてゐる。描こうとしなかつたわけではない。

今までにもたくさん彼女の顔は描いてきた。それなのに、この絵だけはどうしても、完成させることができない。

「もう本物を見る」ことができない、か。この人は奥さんよね、クライス？」

「ああ。小さく彼は答えた。

「半年前に、はやり病で死んだ妻だ」

部屋の中には金髪と碧眼を持った女性の絵ばかりが飾つてある。彼女と出会つてからずっと、クライスが描いてきたものだ。そのどちらもが、やわらかな笑みを浮かべている。

「あなたはいつも、彼女を見て描いていたのね」

「ポムは納得したようにうなずいた。

「真実を描く画家 本物が目の前になければ描けない。そのことに対する皮肉よね」

「……そうだな」

「ポムの言つとおりである。

「さんざんもてはやされてきたけれど、結局はそういうことや。描きたいのに、もう僕はいちばん美しいショリーを描けない」

今までに描きためた絵を参考にしても、駄目だった。

「ショリーを描くのは、これが最後だつて決めたのに」

彼女がいなくなり、これから未来に向き合つことができなかつた。そんな自分に蹴りをつけるために、この絵は絶対に完成させなければならぬ。クライスはかたく信じていた。

「……ポム。君はほんとうに、どうにかできるのかい」

藁にもすがる思いだつた。

赤毛の魔女は、部屋一面に飾られたショリーをじつと見つめている。

「ねえ、クライス」

「どうかしたのか？」

「彼女。とても、うつくしいわ」

そう言つて、ぐるりとクライスの方に向き直つた。

「けつして美人ではないけれど、彼女はきれいよ。クライス。たしかに、あなたはいい感性をしている」

とくにあの絵 あの絵は、どんな天才だって、あんた以外の者には描けないわ。

ポムは愛嬌のある笑みを浮かべる。

「だいじょうぶ。あなたには描ける」

もう一度、外に出て。ポムは呆然としているクライスに告げた。

「まずは戻るのよ。原点に」

5、

君の絵を描かせてくれ。そう言つと、彼女は驚いたように目を見開いた。

「ど、どうして、いきなり……」

驚愕するのも、無理はない。クライスは今まで、風景画しか描いたことがなかつたから、巷でも風景画家として扱われていた。美しいものは、自然の風景にしかない。そう信じていたクライスは、それ以外の絵を描くつもりはなかつたのだ。彼女に出会つまでは。

「君は、うつくしい」

单刀直入に、クライスは告げた。

「絵にする価値が、十分にある」

「わたしが。うつくしい、ですって？」

彼女は信じられないとばかりに、肩をすくめる。

「この町を探せば、きれいな子なんてたくさんいるわ。よりによつて、このわたし？自分で言うのも悔しいけど、鼻は変な形だし、そばかすだらけだし……だいたいわたしは、太つてるのよ？」  
不細工とは言われたことはあつたわ、でも、うつくしいだなんて。あなた、どうかしてるんじゃないの。

たしかに、彼女の容姿はお世辞にも美人だと呼べるものではなかつた。

だが、クライスの言つたつづくしいとは、そういうものではない。

「君は気づいていない」

彼はまっすぐ彼女に向き直つた。口悪いの色を帯びた青い目と、視線がかちあつ。

やつぱり、これだ。

クライスははつきりと悟つた。自分の感覚に間違いはない、と。

「いいかい、君 ええと」

「シエリーよ」

「じゃあ、シエリー」

彼女が何者だらうと、そんなことは関係ない。たとえ初めて会つた人だとしても、絵のためには常識などかまつていられなかつた。「君は、本当に美しいものは目に見えるのかと言つたね。そういうことを」

「そういう、こと……？」

「そうだ」

まずは黙つて僕に絵を描かせてくれ。クライスは懇願する。「君のおかげで何が本当に美しいのか分かつたんだ。そして君はちようどそれを持っている」

それが彼女との人生のはじまりだつた。

\* \* \*

原点に戻る ポムは言つた。原点？ 原点とはどこなのだらうか。生まれ故郷か、それとも絵を描き始めたころに住んでいた家？ もしくは旅立ちを決意した町か。

「違うわ」

ポムは、ぼうきにクライスを乗せて飛びながら叫んだ。

「そんな昔に戻る必要はないわよ！ 原点つていつたら、決まって  
いるでしょ…」

「うわあ、いつになく飛ばすなあ。リコルがポムの赤い上着につか  
まりながらつぶやく。

「あつたりまえよ。この男に早く思い出せせてあげなきゃ」

「奥さんが報われないでしょ？」

「そういうことだから、クライス！ あんた家に戻つたらすぐこ  
絵を描きなさいよ？」

そうしてポムは、クライスに下を見るよつに告げた。

「覚えてこいるでしょ。ここを」

足の下には、壮大な草原が広がつてゐる。一目見た瞬間、クライ  
スは言葉を失つた。茶の目を見開いて、眼下を凝視する。

原点。

ポムはぼうきを操り、草の上に降り立つた。果然としているクライ  
スを振り返り、ポムは自信満々に笑う。

「ここがあんたと奥さんが出会つた場所。そうよね？」

何も答えることができないまま、クライスは草原を一步ずつ踏み  
しめた。あのころと変わらない感触が、靴を通して伝わつてくる。  
辺りを見渡すと、緑の大地がどこまでもどこまでも広がつていた。  
ここへ来た最初は、この雄大な自然に心ひかれたのだ。

この風景を描いている、そのときに。

「そうだ……シェリーはここで絵を描いていた僕に声をかけてきた  
んだ」

声に出してみると、あのころの記憶が少しずつよみがえつてくる。

「そして僕は彼女に惹かれて それで、絵を描かせてくれつて何  
度も頼んで」

「ああ、そうだった。」

「そして、あの絵を描いたんだ」

あの絵は、どんな天才だつて、あんた以外の者には描けない

わ。

そうポムが絶賛した、シェリーの絵。

「やつと思出した？ クライス」

後ろからポムが問うてきた。

「風景画ばかり描いてきたあなたが、四苦八苦しながら初めて描いた人物画。それを描くときの気持ちが分かつたかしら」

「ああ……なんで、こんな大切なことを忘れていたんだろうな」

「ここにきて、ようやく分かつた」

「目に見えない美しさをあらわす いつの間に僕は忘れてしまつたんだろう。せっかくシェリーが教えてくれたのに」

あら、いいのよ。紅魔女はすべてを認めるようにうなずいた。

「人間は忘れてしまう生き物だわ。それに、あなたはたくさん彼女の絵を描いた。描きなれてきたから、本来の描き方になってしまつただけ」

でも、今なら描けるでしょう？

ポムはほうきを手にとる。

「あなたが求めた彼女は、目に見えるものだけじゃない。ちゃんといたでしじう？」

ああ。

クライスは、はっきりと肯定した。そして彼は言つ。

「描きたい。今すぐ描きたい。早くこの思いを描きあらわしたい！」

6、

あいつは、そのシェリーっていう女を、絵の対象として愛していたのか？

ポムの肩の上で、赤い猫が問う。

『芸術家っていうのは、そういうふうでしか人を愛せないのか？』

「違うわよ、リコル」

ほつきの上で、のんびりとポムは答えた。

「彼はちゃんと、ひとりの人間として彼女を愛したわ。彼の絵を見ればわかるじゃない」

あれほど人間としての美しさを、絵で表現できる者は数少ないわ。だけどね。ポムは言つ。

「彼女をいちばん美しく描けるのは、やっぱり彼しかいなかつたのよ。それってやっぱり、愛の証拠じゃないかしら」

『ポム……お前最近、そういうの好きだなあ』

「ふふ。誰かを思つてる人を見るのつて、しあわせだもの」

彼女は空を仰ぐ。

「彼はもう大丈夫ね。きつとつまくやれる」

絵と恋人。そのどちらも選べなくて、両方を自分の手から離さないようになつた男なのだ。恋人を彼女の故郷から連れ出し、ずっと一緒に旅をした。それくらいのことができるのだ。心のもやがなくなつた今、彼を阻むものはもうないだろつ。

『そういうやポム』

リーフルがふとつぶやいた。

『報酬つてもらつてないよな?』

「ああ、そのこと」

赤毛の魔女は、分かりきつたことを、とばかりに息をつく。

「もらつたわ。報酬なら、いつもよりたつぱり」

『え? 何を?』

「ふふ。内緒よ」

さあ、早く森に帰りましょう。ポムたちを乗せた巨大なほつきは、空のかなたへと消えていった。ポムのほほ笑みだけ残して。

筆をおくと、クライスは椅子から立ち上がった。完成した絵を眺め、ひとりうなづく。

シェリー。

頭の中で、彼は妻に呼びかけた。

君も見ているかい？ 空の上から。

彼女の絵が描けない。そう思つた瞬間、彼は近くの森にある崖から飛び降りようとした。シェリーを描けないのなら、いつそ死んでしまおうと、その時は思ったのだ。

だが今考えなおしてみるとやはり、あの紅い魔女に助けられてよかつたと心の底から思う。

シェリー。僕はやっぱり絵を描かないなんてことできないよ。彼は、心の中にたしかに存在しているシェリーに言つた。

だから、これからも美しいものを描き続けるだらう。もう描かないなんて決めたけれど、やっぱりいちばん美しいのは君なんだ。それを許してくれるかい。声なき声で問う。

部屋の壁に掛けられた一枚の絵。草原に立つたシェリーはやわらかくほほ笑んでいた。曇りひとつない鮮やかな笑顔で、彼女はクライスを見つめている。

わたしでいいなら。

彼女ならこう言うだらうな、と彼は考え、描きあげたばかりの絵を見やつた。

晴れ渡つた空を背景に、シェリーはクライスに向かつて手を広げる。その顔に浮かぶのは、クライスが何よりも愛したほほ笑み。絵の中のシェリーと目が合い、彼はつられて笑みをこぼした。やっぱり、君は美しいよ。シェリー。

これも全部あの魔女のおかげだな。クライスは、自分を家に届けるなり、さつさと帰つてしまつた少女を思い浮かべる。

シェリー。次に君を描く前に、ひとつだけ違うものを描かせてくれないか。

本物を見て描かなくたって、できるさ。彼女がその方法を教えてくれたんだから。

題名は『紅い花』なんていうのはどうだらうか。

アー・ルリア。声に出してみて、はつとクライスクは氣づく。アー・ルリア アールリア

おどぎ話にでてくるアールリアと同じじゃないか。幼いころ母が聞かせてくれた夢物語。断片的にしか覚えていないが、たしかあの話は。

しあわせを届ける魔女、か。なるほど、そういうことだったんだ。クライスクは、ようやく納得した。あの紅い魔女の不思議な力を。もしかしたらポムがあのアールリアだつたのかもしれないな。そう考えて彼は顔をほころばせる。

シェリー。聞こえているかい？

クライスクはまた、心の声で呼びかけた。

僕は幸福というものを見つけてもらつたみたいだ。ほんとうの君を描けることが、何よりも幸せなんだ、僕は。

はじめて描いたシェリー。たつた今描き終えたシェリー。彼女たちは、先ほど見たときよりも笑っている気がした。

\* \* \*

『これが、わたし……？』

『そうだ、ほんとうの君だ』

『わたし……こんなにきれいなの？ ほんとうにわたし？』

ああ、と彼が答えると、彼女はクライスクが描き上げた絵をまじまじと見つめた。

『たしかにこれは、わたしそっくりだけど……。なんでだろう。とても美しく見えるのよ』

『それが目には見えなかつた美しさつてやつさ』  
クライスは言つ。心の底からそう信じていた。だから彼女に告げ  
る。

『これからも、ずっと君を描かせてくれないか?』

【 The End 】

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0272k/>

---

世界の森のアーレリア

2010年10月8日15時08分発行